



新しい時代に適った「公共性」と「多様性」の実現に向けて

廣澤 愛子・矢内 琴江・笹原 未来

コロナに始まりコロナに終わった2020年が瞬く間に終わり、2021年がスタートしました。年が改まったものの、状況は依然変わらず、コロナという誰も想像しなかった事態によって、私たちのライフスタイルは大きな変化を余儀なくされています。教育や学習の在り方においても、オンラインを活用することが必須となり、Zoomなどを用いたカンファレンスを頻繁に行うようになりました。これは、今年の今頃には、想像もつかなかったことです。しかし、オンラインを用いることによって、互いに遠く離れていてもカンファレンスを行うことができるようになり、その利便性・効率性は計り知れません。一方、お互いの姿を確認し合える公共的な場でカンファレンスを行うという、これまでなら当たり前だったことが実施困難になり、オンライン上でブレイクアウトセッションごとに分かれて行うカンファレンスでは、ある種の閉鎖性・断絶性が生まれているのも事実です。オンライン上で行うカンファレンスを、開かれたコミュニケーションの場にしてゆくにはどのような工夫があるとよいのか、新たな知恵とアイデアが求められています。

ところで、私たちが所属する教職大学院は、多様な専門性、職歴、そして文化的背景を有する人たちが集まる組織です。教職大学院の発展とともに、その多様性はこれからますます加速していくことが予想されます。多様性を包摂する組織においては、互いの持ち味を活かしながら、創造的な仕事を実現すること

ができますが、その一方で、知らず知らずのうちに自分とは異なる価値観を受け入れることが出来ず、自分の考え方や感じ方に固執してしまう危険性もあります。組織が発展し多様性が広がるほど、かえって、このような閉鎖性・断絶性を生む可能性も増すと考えるかもしれません。私たちがお互いの在り方を尊重し、真に対等な関係を築きながら質の高い仕事を持続していくためには、一層の工夫と配慮が必要と言えるでしょう。

このような状況を踏まえて、私たちは、新しい時代に適った教育や学習の環境を整え、公共性を保障するとともに、多様性を持続的に認めあえる組織へと成熟することを目指して、2020年12月15日の教職大学院FDで、「第1回ハラスメント学習会」を実施しました。「ハラスメント」という言葉を耳にすると、何か近寄りたがたいような印象を抱かれることもあるかもしれません。けれどもこの学習会は、ハラスメントというインパクトのある言葉を通して、その真逆の状態、つまり、「お互いの人権を尊重し、個性を生かし合う」という多様性を包摂した組織を持続

内容

- 巻頭言にかえて (1)
- スタッフ自己紹介 (2)
- インターンシップ/金曜カンファレンス報告 (4)
- ミドルリーダー/マネジメントコースだより (7)
- 10・11月月間合同カンファレンス報告 (14)

的に実現するための、工夫と配慮について考えることを目的として企画・実施されました。そして、ハラスメントの定義や国際労働機関による条約、さらにハラスメントに関わる法改正などに触れながら、私たちの組織で起こりうる具体的なハラスメント状況を提示し、組織の公共性と多様性を真に実現し続けるための方法を検討しました。

この学習会を企画・実施する中で私たちが感じたことは、「自分が無意識的に行っていたかもしれないハラスメント的行為があったのではないか」ということでした。つまり、自分の在り方を振り返ることを通して、自らの体験や考えに捉われてしまい、想像力を働かせながら相手を理解することに欠けていたことがあったかもしれない、ということに気付かされました。そして、自分の見方・考え方を絶えず見直し、自分とは異なる見方・考え方と出会うことそのものに、私たち自身が開かれている必要があることを痛感しました。そしてまた、このような加害者性を意識化すると同時に、「周囲への配慮や、自分の傷つきを認めることへのためらいから、自らの被害体験を無意識的に抱え込んでいたこともあったのではないか」ということにも思い至りました。このように、「ハラスメント」や「差別の問題」といった切り口から、

組織の「公共性」や「多様性」の実現について考えていくことは、自分の認識や言葉、体験をふり返ることになり、加害者性と被害者性を浮き彫りにする、なかなかしんどいプロセスでした。けれども、お互いを尊重する言葉を一緒に創り出し、真に対等に学び合う関係を創っていくことにつながる、とてもクリエイティブな試みであることを、改めて実感しました。つまり、私たち3人にとって、この学習会の企画・実施は、自らの在り方を省察し、「他者理解・他者配慮」と「自己主張」をバランスよく体現していくことの重要性を、心の底から実感させられるような深い体験だったように思います。

これからもこのような学習会を通して、ひとりひとりの個性が活かされる組織であり続けるには、どのような考え方や言葉、態度、そして関係性が大切であるのかについて、皆さんと共に考えていけたら…と思っています。コロナ禍は、私たちに過酷な試練をもたらしていますが、同時に、新しい風を運んできてくれているようにも感じます。時代の流れに沿いながら、私たちの組織が良い方向へと発展してゆけるよう、「自己省察」をキーワードにしながら、ともに歩んでいきたいと考えています。

スタッフ自己紹介

未来社会へと向かう学校を支えるために

福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程/連合教職大学院准教授 **柳本 一休**



今年度、教職大学院と附属義務教育学校を兼務している柳本一休と申します。2013年4月、私は公立中学校から附属へと異動してきました。この年は夏季オリンピックの東京誘致が成功し、「お・も・

ンデミックが起こり、オリンピックが延期になることなど思いもしませんでした。まさに予測不可能です。コロナ禍により様々なニューノーマルが生まれ社会が変化しています。

一方で私はこの8年間、附属で地道に授業研究を積み重ねてきました。自身の8年間についてのまとめを「教師教育」に投稿させていただく際に数えたのですが、対外的な公開授業は13回となりました。そ

て・な・し」が流行語大賞になりました。7年後にパ

の一つ一つに単元開発と実践記録があります。社会がどのように変化しても変わらない「協働探究の価値」を、数学の授業における子どもたちの姿の中に見出そうと試行錯誤を続けました。「どのような問いをなげかけようか」「どの子どもの考えを、どのようにつなごうか」と、授業は一回一回が勝負です。例えば立体をつくる子どもの姿やグラフを分類するときの視点を生み出す姿など、きらめくような子どもの活動が生まれ、「授業はこうすればいいのか!」という啓示のような気づきをもらいました。あまりの感動に授業をしながら熱いものがこみあげてきたこともあり、こうした経験を積み重ねるうちに、「なぜ数学の授業をするのか」という問いに対して自分自身の考え方が変容してきました。それは、「教科としての本質的な学び」に子どもが触れたとき、単なる知識や概念の習得に止まらない資質能力が培われ、その子の学びが数学を超えて発展していくことです。前者は客観的に測定可能で誰もがイメージしやすいですが、後者は主観的で測定できず、わかりにくいものであることも事実です。後者について問主観性が保障できるように、共通の枠組みをもつ必要があります。

私は OECD ラーニングコンパス 2030 や、そこに示されているエイジェンシーやコンピテンシーがその役割を果たしてくれると考えています。私自身 OECD について PISA 学力調査の印象が強く、ラーニングコンパスやエイジェンシーに対しても、何か目新しい派手な言葉という先入観を持っていました。しかし、OECD 日本イノベーション教育ネットワーク研究会 (ISN 研究会) に参加し、実践を報告したり、研究者や教師や教育行政関係者や生徒がフラットな関係で学びや評価について語り合うワーキンググループに参加したりすることで、「何のために数学を学ぶのか」というカリキュラム開発の根源的な問いに正面から向き合うようになりました。そしてラーニングコンパスは特定の学習論や評価論を示すものではなく、多様な学びが子どもにもたらす可能性を捉えるための大きな枠組みであると考えようになりました。また、誰一人も取り残すことなくウェルビー

ングを実現する社会をつくりたいという強い意志を感じるようになりました。

「教科の本質的な学び」についての議論とラーニングコンパスなどに表現される「学校(教育)の理念や存在目的」についての議論が分離することなく往還しながら進んでいくことが、未来に向かう学校づくりに求められているのではないのでしょうか。この往還は FD で柳澤先生が提起される大学院の構想にも深く関わることではないのでしょうか。私のように教職大学院スタッフと附属教員を兼務する人間は、往還のボンド的役割を果たさなければならないと思うのです。

数学は階層的な概念構造をもつので、授業研究も単元ごとに細分化される傾向が強いです。私も一単元の一時間の授業について検討する研究授業を行ってきました。コロナ禍で集合型の研究授業が中止され、福井地区中教研数学部会図形員会では、単元全体を構想・実践し、子どもの学びを報告し合う取組が行われています。ある先生が、子どもたちが図形を作り、作る過程に表れた見方考え方を教師がつなぐ授業を構想しました。このような授業では教科書通りの展開になるとは限りません。子どもの考えをどのように取り上げ、何に落とし込んでいくのか授業中に判断が求められます。その先生は教科書を離れることに不安を感じ、教科書の流れに戻ろうとして、子どもの文脈から離れていこうとしていました。私が、その先生の授業に表れている子どもの文脈の価値を話すと、新しい授業展開での子どもの姿が思い浮かぶのでしょうか、その先生の目がどんどん輝いていくのです。挑戦的な実践にはリスクが伴います。横並びが求められることもあるでしょう。若い先生が挑戦的な実践にチャレンジするにはサポートが必要です。また、若い先生の挑戦なくして教育の向上はあり得ません。何か特定の理論や経験に子どもを当てはめようとするのではなく、共に見取った子どもの学びの価値を語り合うことが強力なサポートになります。教職大学院は、未来社会を担う子どもたちために挑戦的な実践にチャレンジする教師、また挑戦的な実践を生み出す学校をマネジメントする教師に寄り添い支え続ける存在だと思えます。

インターンシップ／金曜カンファレンス報告

「生活」に生きる音楽科

授業実践・教職専門性開発コース 1年/福井大学附属義務教育学校後期課程 畑中 良太

「音楽ってなんで勉強するんですか?」「この先の入試とかで必要ですか?」「音楽を聴くのは好き。歌うのも嫌いじゃない。でも音楽の授業は好きじゃない。」

このような生徒の声を、インターンが始まってから半年の間に多く聞いてきました。授業中つまらなさそうにうつむく生徒に、音楽の授業に興味を持ってもらうためには、楽しんで授業を受けてもらうにはどうすればよいのだろうという悩みがありました。その悩みから、学校の中の音楽の授業の在り方や音楽を学ぶ意味について追及していくと、私が目指す音楽科の授業の在り方というの少し見えてきたように思います。

興味というのはどんな対価を払っても手に入れなければならない音楽教育の必需品だと考えています。なぜなら、興味を感じない生徒に、テストも入試もない音楽科の教育をすることは不可能だからです。音楽が必修でありながら、音楽に無関心もしくは敵意を抱いているような生徒は、音楽から教育的にも人間的にも得るものは1つありません。音楽はうんざりするもので、反発を感じる科目であり、その原因は音楽に対する興味の欠如です。J.デューイは興味を「自己と対象の同一化」と定義しましたが、それは自己の内なる目的と仕事とが一致するときに興味が起こるという意味であり、興味がないところに教育的価値を期待することは不可能です。

しかし、矛盾しているように聞こえるかもしれませんが、教育の内容は興味の有無によって左右されません。というのは、生徒にとって興味のあることだけを教えていても意味はないということです。読み・

書き・算数を学ぶのは生徒にとってそれが、興味があるからではなく、面白いからでもなく、大切だから学ぶのです。

「これを学べば、自分にどんな利益があるんですか」と生徒に聞かれた時点で、その生徒はその教育に対して、興味も学びの価値も感じていません。教師が学習の価値を生徒に明らかにすることができれば、興味は自然と起こってくるものであり、興味を呼び起こすには、学ぶ事柄の重要性(価値)を、生徒にはっきりと認めさせなければならないのです。

ではどうすれば生徒は学びの価値を実感するのでしょうか。1つの方法として学習のつながりを挙げます。学習がつながれば、他で学んだことを活用できる場面が登場します。自分が身につけた力や知識が別の場面で役に立った時、生徒は学びの価値を感じるのではないのでしょうか。そこで、つながりを意識して中学一年生に、シューベルト作曲の『魔王』を題材とした授業実践を行いました。授業案を考えるときに「200年前のこの曲を取り上げてどのように興味を生み出すか」ということに悩みました。同じ7年生のクラスで授業をしている数学の先生と話をすると、「文字の式」において基石の総数を求めるという題材を紹介され、そこでは生徒たちが図の囲み方から見出した文字の式の「なぜ?」を探求していく単元を構成していました。授業中、生徒たちは図の囲み方について「ずるい」「せこい」「うまい」など感覚的につぶやいていき、そこから「うまい囲み方」とはどうかを考えています。この話を聞き、感覚的につぶやいた自分の感情を明らかにしていく、元々自

分の中に持つ感情を揺さぶるという活動に学習のつながりを感じることができました。

実践ではまず『魔王』という曲と出会い、感じた感覚を自由につぶやいてもらいました。そこからそう感じるのはなぜか、「魔王はなぜ怖いと感じるのか、怖いとはどういうことか」を音楽の演出という部分に着目して探求していく単元を構成しました。授業で数学の基石の話を出すと生徒たちの反応も良く、自分の感情に疑問を持つという活動は、数学の授業で事前に行っていたため、うまく子供たちに興味を起こさせることができたと考えています。

ここまで興味と学びの価値についての話をしましたが、最終的に目指したいのは学習の生活への移行です。興味・学びの価値は学んだものが実生活に活用されるかどうかを決定する重要な要素でもあります。歴史についての生き生きとした興味が学習者の心に

残れば、たとえその細部は忘れられても、歴史の本を読むとか、現代の出来事を過去のそれと照らしあわせて解釈するとかいう形で学習の影響があらわれてくると思います。音楽科でも同様で、私が目指す音楽科の授業は、音楽が、学んだ生徒の「生活」に生き「生活」を改善していくものになる、つまり生徒たちの「生活」を豊かにし、その発展に影響を与えるような授業です。音楽科は生徒に勉強を課するということをしない、また、試験に重きを置かない学習形態をとります。音楽科の本質は、多様な音楽活動の中に含まれているのであって、音楽をただの学習に終わらせるのではなく、生活に生かすことを重要視することが必要です。今後も常に学習の生活への移行という問題を忘れず、興味、学びの価値を起こさせる授業実践を行っていきます。

「人間」と関わるには？

授業実践・教職専門性開発コース1年/福井大学附属義務教育学校後期課程

木原 万由子

「生きるって何だろう？」

この疑問は、部活動中に一緒にいた生徒たちから出てきた疑問である。カメの散歩中の会話から何気なく生まれた疑問。私たちはカメよりゆっくり歩きながら共に考えていた。皆に共通する明確な答えは出なかったが、ひとつ言えるのは、生徒それぞれ生きることに対する価値観はきっと違っているということだろう。

インターンシップが始まり早6ヶ月。週一回の頻度とはいえ、私は様々な生徒からお話を聞く機会に恵まれた。共に過ごす中で、学校のこと、容姿のこと、家庭のこと、未来のこと、生きることなど、様々なお話を聞く機会があった。

一人一人自分が抱える問題と向き合い、時には一休みして、考え続けている。たまに周りから励まして

もらっている生徒もいるだろう。何気ない雑談でも、ある事に負の感情をみじんも感じなかったらしんどさや不満の言葉は出てこなし、怒った声にならない。

一人一人の言葉をじっくり噛み締めながら、今はどういう言葉が彼ら彼女らにはいいのだろうか考え続けていた。

しかし、最近あることに気づいた。それは、相手が懸命に考えている時にかかる言葉に万人共通の不適切な言葉があること。そして、万人共通の適切な言葉はなく、一人一人適切な言葉は違ってくる上、タイミングやその言葉について振り返る時ですら、言葉の意味は違って来るから、真の正解は無いということである。毎度毎度誰かと喋る度に、相手に対してその言葉は合っていたか頭の中で何度も答え合わせをしていた。しかし、それは無意味な場合もあるのだ。

そもそも答え合わせという言葉自体、人間をまるで一定の言葉をインプットされたロボットか何かのように思っているようで、大変不適切かもしれない。

そう思うようになってからは、ほんの少し自然と言葉が出るようになり、そしてその分生徒から話す内容も増えたように思う。そして、授業や休み時間に関わらず、共に考える機会も多くなってきた。グループワークや探求で考えることに慣れている附属の生徒から、新たな発想をいただいたり、納得させられたりしたこともある。徐々に私自身も自然に考えることがより楽しくなっているように思う。それは誰かのものさしを意識せずに、自分自身の言葉で話しているようにしているからかもしれない。

昨今の人間は考え、自分の言葉で発信する機会が減ってしまっているように私は思う。

インターネットで検索したらあらゆる答えが簡単に出てくる情報社会。誰かの答えをコピーして自分の答えになりすませる情報社会。同調圧力に負け引

きずられる情報社会。失敗した人に対して凄惨なネットリンチを行う情報社会。

文字を1文字打てば簡単に文章が出てくる情報社会。

あらゆることが便利になった反面、人の心がだんだん削れていく感覚がある。

だからこそ、悩み考えるという人間の特性をより尊重したいし、その時間を大事に生徒に持って欲しいと思っている。悩むことは辛い。考えることはしんどい。しかし、それ自体人間ならではの大事な働きで人として生きることだと考えている。

また、私はロボットと関わっているのではなくて、生身の人間と関わっている。じっくり何かを考えて生み出そうと、人間として一生懸命生きている生徒に寄り添える教師になりたい。

附属での学びは私に「人間と関わるには？」という永遠のテーマについて考えさせられるきっかけとなった。

自己の変容を構想のかたちにして

授業実践・教職専門性開発コース2年/福井市至民中学校 黒田 苑

長期実践報告書の構想ができあがり、自分自身の変容を捉え直す時期になりました。今から2、3年前の学部生の教育実習の頃の自分と比べ、その頃よりは随分いろいろなことを考えるようになったのだと感じております。教育実習をしていた頃の私は、指導案を作るように授業の導入と主発問や、それに伴う活動を考えていました。まさしく教員免許を取得するために「授業をやりきる」ことで精一杯だったのだと思います。

例えば、「今に生きる言葉」(故事成語)であれば、漢文を初めて学ぶ中学生にとって、今もどれだけ故事成語が身近にあり使っているのかを「五十歩百歩」と「矛盾」を通して親しむことをねらっていました。他の故事成語の原文にも触れ、日常生活のどんな場面でこれらの故事成語を使って文章を表現できるか

を考えていました。また、「字のない葉書」(随筆文)であれば、筆者の父親の人物像を物語から追うばかりで、果たして子どもがこの教材でどの部分に心を動かされて考えたのかまでは理解できていませんでした。

教職大学院に入学し、授業実践だけではなく授業参観をするようになってから、この一見するとまとまりのある「分かりやすいもの」は、実践者の先生と子どもの関わりなど、よく目を凝らさなければ見えてこないものだということが分かりました。このことを2年間のインターンシップを通してよく学んできたのだと思います。

1年目は、どちらかといえば「どんな授業か」というところばかりに目がいていました。そういった意味で「どんなふうに授業をするのか」を考えていた

と思います。詩の教材で4クラスの授業実践をした時に、目の前の子どものことを考えて授業をすることが大事なのだということを、当たり前のことですが、まず思い知らされました。1年目の数か月の記録を振り返った時に、「子どもの学びを大事にできるくらいにはまだ授業参観できていないな」と痛感しました。それから2年目の現在まで「子どもの学びとは何か」「子どもの学びの変容とは何か」を考える機会を先生方から頂き、今の私の大学院生という立ち位置で考えられることを前向きにやりたいと思いまし

た。これまでの授業参観の振り返りでは「どこを見るのか」「将来的な視点で考えるのか」など問い続け、右往左往したために先生方にご迷惑をおかけしてきたと思います。それでも、自分なりに向き合って「まだ分からないな」「すごく難しいな」と悩んできたことが、本当に考えるべきことだと実感しました。あと数か月で現場に出ることになりますが、できる限りの準備をしてスタートダッシュを決めたいと思います。

ミドルリーダー／マネジメントコースだより

本物の語り合い

ミドルリーダー養成コース1年/長野県岡谷市立川岸小学校 久保田 美千代

私は幼い頃から、話し下手でした。友だちとの会話では聞き役の方が多かったような気がします。教員になってから、授業研究会等で考えを求められても、言葉につまることがたくさんありました。昨年度、市内の研究主任が集まる研修会で突然指名されて何も言えずに司会者の方を困らせたことがありました。この研修会から勤務校へ戻る車の中で「やっぱり…。私にはまだまだ研究主任なんて無理だ。」と、かなり落ち込みました。

4月。「カンファレンスって何だ?!」から始まった私の教職大学院での学び。まずは、カンファレンスでの語り合いの時間が長いことに驚きました。初対面の人たちと1時間半も何を話すのか…。しかし、経験してみると、あっという間に時間が過ぎていきました。居住地や校種、これまでの経験が異なっても語り合うことで気づくことがあるのだと知りました。自分の頭の中にあることを言葉として発することで、自分の思考が整理され、教師としての自分が大切にしていることがはっきりしてきたように感じます。カンファレンスを重ね、私自身の聴き方も変化してき

ていると思います。グループセッションで一緒にさせていただいた先生の言葉を受けながら、私の頭の中には過去に出会った子や現在関わっている子の姿が浮かんだり自分の実践が思い出されたりしています。言語化し、考え、思考しながら聴き、再び言語化する。教職大学院に入学して、私はやっと「話すこと・聴くこと」の深さを知り、語り合う学びの楽しさ、本物の語り合いを知った気がします。幼い頃から話し下手だと感じていたのは、そもそも話すものがない空っぽの自分だったのではないかと考えるようになりました。授業研究会で言葉につまった自分、研究主任研修会で何も言えなかった自分、それは自分の中に軸となる考えやそれを支える知識や経験が無かったからです。これまでは、自分と向き合い、教師としての自分の考えを構築していく時間も十分ではありませんでした。本物の語り合いを経験したことで、私自身はほんの少しだけ成長できた気分になっています。今は、この語り合いを子ども達、先生達にどう広めていくのかを考えています。

子ども達が語り合う授業をめざし、今年度取り組んだことの1つが「自分の当たり前をとっばらう」ことです。私が担当している理科は、子どもが自分の考えを持ち、まとめる時間として主に「予想」と「考察」の場面があげられます。これまでは、自席で自分の考えをノートに書く時間があり、その後と同じ班の友だちや学級全体に伝える時間を設けてきました。個人で予想や考察を進められる児童もいれば、停滞してしまう児童もいます。そのような場合、「隣の友だちと相談してみたら？」と声をかけることが多かったのですが、今年度は「誰と考えたい？」「誰の考えを聞いてみたい？」と声をかけるようにしました。すると、子どもが理科室内を自由に動き回り、儀式的ではない本音の言葉が聞こえてくるようになってきました。自分が小学校入学以来受けてきた授業も、教員になってからも「授業は自分の席で座って」というものが当たり前だと思っていましたが、その当たり前から外れたところに、子ども同士の本物の語り合いがあるのだと気付きました。

語り合う職員集団づくりのために、まず研究主任会を立ち上げました。3つある研究部会の主任3名が、金曜日の放課後職員室に集まっています。今週の部会で話題にあがったことや次回の予定を共有することが目的ですが、大抵はそれ以外の話で盛り上が

りました。研究主任会を職員室で行ったのは、「部会主任3名が定期的集まって話している」という姿を周りの先生に見ていただきたかったからです。この、職員室でのゆるりとした語り合いは、11月になり「授業を語る会」という名で開くことができるようになってきました。本校は、一人一公開として授業を見合うことをしていますが、一公開授業のあった日の放課後に「15分間」と時間を決めて授業者と参観者が授業について語っています。この15分を生み出すことがとても難しかったのですが、本校は11月から冬季日課となり児童の下校時刻が早くなります。そこでできた隙間時間に「語る会」を入れることができました。冬季日課の間に「語る会」が本校職員室の日常の風景となるよう、計画していきたいと思っています。

はっきりとした成果が見えるような実践はまだまだできていません。うまくいかないと感じることの方が多いです。それでも、私は自分と向き合うこと、多くの方と語ることに挑戦していきたいと思っています。何年後かに、本物の語り合いが校内のいろいろな場面で生まれことを願って。

過去を拓げ、未来を拓げる

ミドルリーダー養成コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校 川崎 耕介

私には夢があります。それは、本校を小学校(前期課程)とか、中学校(後期課程)とか分けるのではなく、義務教育学校という1つの学校にすることです。そして、そこには幼稚園の学びが系統的に編み込まれ、子供にとってより学びの面でも生活の面でも、拓がりをもった学校にしたいと思っています。そんな学校は子供にとっても、教師にとっても魅力に溢れたものであるようにしたい。そこには、子供と教師が有機的に(温かみをもって)紡がれている協働性を孕んだ実践コミュニティがあってほしいと思っています。

とても抽象的で、分かりにくいかもしれませんが、私の中には確実なイメージが、色、温度等と絡み合い心に強く根付いています。そして、現在、そんな義務教育学校となりえるためにはどうしたらよいか、本校に在籍している仲間たちと共に、語り合い、検討し、挫折し、でもまた立ち上がって、日々研究しています。

このような、未来の学校を創るような挑戦は、答えのないものを追究するようなものです。また、様々な要因が絡み合うため、そう簡単には進みません。そのような中、教職大学院で長期実践研究報告を書かせ

ていただく機会を賜りました。そのことで、省察を欠き経験値に依存してきた時間の流れの中で一旦立ち止まり、自身の実践を長期的に俯瞰することができています。そして、少し夢へのヒントが見えてきたように思います。

ある合同カンファレンスの時のこと。私の夢への挑戦を語っていた時に、ある特別支援学校の教師の組織、子供との関わりについて教えていただいたことがありました。その話は、私にとって何の違和感もなく聞こえ、今の夢の原点があるように感じました。それはなぜか。答えは簡単でした。私の長期実践研究報告に記載する予定のなかった特別支援学校での講師時代に、私がそのように子供との関わり、そのような組織に属した経験があったのです。そして、私の夢はその経験から広がっていたのだと気付かされたのです。

その学校は、幼稚部から高等部まで同じ校舎にありました。生活の中で、多様な発達段階の子供が混ざり、学んだり行事を行ったりしていました。職員室は幼稚部だけは違うものの、同じ空間に小学部から高

等部までの教師がいて、幼稚部から高等部まで13年間の子供の成長を互いに見取り、「あの子は小学部のころはこうだったけど、高等部に入ってこういうところが成長したよね。」と、互いに語り合っていました。校務分掌も幼稚部から高等部までの教師が混ざった組織に割り当てられ、一体となって運営されていました。まさに、今目指している学校の在り方の原石のようなものに触れていたのです。

このような経験から、長期実践研究報告に携わること、他者の実践を読み、自己の経験を再構成する価値があるということの他に、自己の経験からも学び、過去の時間を上げられることを身をもってしました。そして、今につながり、未来が拓くことも。

現在、長期実践研究報告を書きあげている最中です。これからは、特別支援学校の経験も含めて、自身の経験からもっと学び、その経験を超えていきたいと思います。そして、そのことで、私(私たち)が思い描く附属義務教育学校を実現していきたいと思いません。

「継続は力なり」

学校改革マネジメントコース1年/小浜市西津小学校 梶川 和則

今から2年前、県教育総合研究所で実施されるマネジメント研修に参加した。この研修では、これまでの経験を生かし、広い視野で組織的な教育活動を推進する管理職を目指すリーダーの育成を目的としていた。具体的には、大学からの専門教員による「組織マネジメント」および「カリキュラム・マネジメント」の2日間の集合型研修を柱に、学校内で研修したことを活かしていく「実践型研修」として、CAPDサイクルの研修プログラムである。集合型研修受講後、マネジメントの視点で学校教育活動を捉え直し、具体的に取り組む「実践プラン」を立案し、チームとして動く実践につなげ、管理職に提案するという、リーダーとしての実践力を磨く流れになっている。また、プラン実践中に、遠隔システムを利用した学校別協議を行うことで管理職に直接意見を聞き、実践してい

く上での問題点、課題を明確にすることで、より効果的な実践になるようになっていた。当時、教務主任だった私は、現在の立場でどのように学校運営に関わることができるのかと悩んだが、所属校の実態に対して、働き方改革と業務改善の両面において実現可能なことを管理職に提言し実践させていただいた。これは、当時の管理職の理解と同僚の協力がなければ実現できなかったことだと心より感謝している。

1年間の実践が終了した昨年度の春、その学びを教職大学院へ行ってさらに深めてみないかというお誘いを受け、1年履修のための事前履修という形で夏期・冬期の集中講座と2月のラウンドテーブルに参加させていただいた。事前履修では、昨年度の自分の実践を語る場や他の院生の皆さんの実践を聞く場

があり、自分自身の視野の広がりがとても新鮮であり、次年度からの学びがとても楽しみになってきた。

しかし、コロナ禍における昨年度末3月から4カ月にわたる臨時休業。新型コロナウイルス感染拡大の影響は、私たちの当たり前だと思っていた日常生活や学校生活を大きく変えることとなった。教職大学院も4月の開校式が中止になるという波乱の幕開けだったが、4月の準備カンファレンスでは教職大学院の先生方のご努力により、ZOOMを活用したカンファレンスが実現した。当初は接続や取扱など不慣れなこともあり緊張しながらの参加だったが、今ではそれが当たり前の感覚になっているのが不思議な感じがする。しかし、対面ならではの熱量が伝わってくる傾聴の場が減るのは少し残念な気がした。

令和2年4月からは教職大学院の学びと同時に、新任教頭として今までとは違う環境と立場の中、新年度がスタートした。教職大学院ではこれまでの実践を深めていく予定だったが、新任教頭として何を軸にこれから研究を進めていけばよいのかを考える余裕もないまま、コロナ禍における新しい学校生活様式への対応に分刻みで追われる日々が続いた。併せて、教職員からの相談・依頼事案は内容はともあれ多種多様であり、文書作成や業者との折衝など業務は多岐にわたった。教職員にとっては新任だろうが経験が豊富だろうがそんなことは関係ない。教頭は教頭なのである。1年間のタイムテーブルが体に沁み込んでいないため、業務が後手後手になってしまい迷惑をかけてしまうことが度々あった。日々心が折れそうになりながらも、「職員室の担任」としての気配り・目配りは欠かさないように心がけた。

学校には、子どもや家庭・地域の実態及び学校に対する願いや思いを基に作成されたスクールプランを

実現するという責務がある。そのためには、具体的かつ実効的な方策を立案し、資質・能力の向上を含めた人材育成を図り教職員の同僚性・協働性を高めることで実効的な組織づくりを行うこと、家庭や地域との連携・協働体制を構築すること、実践の振り返りを通してさらに質の高い教育を提供していくことが求められている。まさに教頭としてどう組織マネジメントしていくかが問われる毎日であったが、今まで2年間の実践が全く意味を持たないものではなく、随所にその経験値から対応できることがあり、指導・助言できる場面も増えてきた。そのため、5月から11月までに行われたカンファレンスやラウンドテーブル、夏の集中講座では、事前履修とは異なる視点(フレーム)を持って参加することができた。また、様々な方との関わりの中で自分を省察する機会を得、実践の振り返りを通して自分の思考や行動が変わっていくことが分かった。特に、年度当初はコロナ禍における各校の取組や思いを聞くことで俯瞰的に物事を考えることが増えた。また、夏期集中講座の「学校づくりの記」や「学習する組織」の書物を読むことで学校づくりや組織づくりに対する考えに深まりを持ったり、私と同じ立場にある方の長期実践報告を読むことで、これからの進むべき道筋のヒントをいただいたりすることができた。

院生としての時間も瞬く間に過ぎ、残り数カ月となった。いよいよ長期実践報告をまとめていかなければならない時期になったということでもある。この3年間の連続性のある学びを通して成長してきたことを今一度かみしめ、これからの展望を描いていきたいと思う。

学び続けることの喜び

学校改革マネジメントコース1年/福井市至民中学校 吉田 清子

今春より、学校改革マネジメントコースで実践研究を積んでいます。合同カンファレンスではコー

スの異なる皆さんとも同じテーブルを囲み、同じテーマで話し合いを行っています。親子ほど年齢の異

なっているストレートマスターの方とも話す機会も多くあり、大変刺激になっています。そのようななか、11月の合同カンファレンスのグループセッションⅡで初めて、同じマネジメントコースの方ばかりでのセッションを行いました。

皆さん、素晴らしい実践と深い考察で圧倒させられました。同じような悩みもお持ちのようで安堵もしました。私は、コミュニティの在り方や、カリキュラム・マネジメントを軸に置いた、組織開発について研究実践を積んでいます。学校組織や文化といった、なかなか変革が難しく、かつ、同僚性や協働が必要で、コミュニケーションが重要な状況において、いかにその機会と場面を創出するか、日々苦慮する毎日であることは、皆さんも同様のようでした。

実践内容についてですが、本校では今春、学校経営研究委員会を設置いただき、学校課題に関する討論の場としています。委員会のメンバーは固定ではなく、管理職と教務部と、研究主任や総合の主任、生徒指導主事や養護教諭をコアメンバーとして、都合のつくものが参加しています。よって、開会については常に全員に呼びかけています。おおよそ、月に1回のペースで開催し、当然、大学院の先生方にもご参加いただいています。

この委員会開催に向けては、都度、時宜に応じた課題についてテーマを設定しており、それに対する学校の取組について説明し、話し合い、ご示唆をいただく…という流れです。コロナ禍での休業中は、生徒に寄り添うこと、そしてその寄り添い方について。学校再開直後は、希望に溢れた学校生活を描くためにどう取り組むか。さらに、再開後1ヶ月経った時には、教員の目に見えない疲弊感をアンケートから読み解いて…というように、その時折の話の「タネ」を蒔き、課題を洗い出し、話し合いを行っています。筆者の活動としては、その「タネ」を選び、提供することや、記録をまとめ、お知らせすること、そしてそこで話し合った内容を実現すべく仕掛けることです。委員会では常に、大学院の先生方から、示唆に溢れた言葉をいただくことができますし、何より、コミュニケーションの重要性を感じ取ることができています。次回は、先日実施した「実践研究発表会」の振り返り

ともいえる校内研究会を、この学校経営研究委員会として開催し、研究発表会に参加された大学院の先生方からのご意見もいただく機会としようと、研究主任と計画しています。今後は、若手の教員の参加がさらに進んだり、もっとインフォーマルな話し合いの場を多く設けることができたりすれば、組織も、授業実践も、より活性化するのではと感じています。

一方、カリキュラム・マネジメントに関係することでは、本校では今年「総合」を軸に、各教科や活動への繋がりを意識し実践していますが、各教科で策定した年間指導計画を見直し、繋げることを、「見える化」することと、授業や行事を実践するにあたって必要な、経営資源（ヒト・モノ・カネ・情報・時間）を精査し、分配するという作業を行っています。ただ、自身が授業を行うことがないため、最も重点とすべき授業改善に係ることについては、深く踏み込んで実践を行えないことがつらいところです。

しかし、そういったことを合同カンファレンスの時にこぼしたら、TTでゲストティーチャー的な位置で関わってみては…というアドバイスをいただき、早速やってみたくと計画を練っています。また、特に拠点校を持たない院生による、授業者としての授業改善の切り口でなくても、学校訪問を重ねながら学校文化の有りようを分析したり、MBAの講座を受講し、経営の面からの学校運営を考察したり、といった新たな切り口で研究をしていらっしゃる様子を拝聴したことで、授業に拘り、卑屈になっていた自分が情けなくなり、「授業ができない」のではなく、「【授業】以外何でもできる」と捉えて、やれることをやっという意を強くした次第です。

学校改革マネジメントコースでの学びは、どんな職種でも、どんな立場でも「学校改革」は行える。そう改めて感じさせていただけの貴重なものです。仲間（とお呼びするのは、大変おこがましいですが）の存在と、すぐそばに指導者がいて学び続けられることに、改めて感謝できる「学びの場」です。いくつになっても、学ぶ姿勢を持っていたい、学び続ける教職員でありたい、そう思い続けていますが、その喜びをいま、日々感じています。

学びは繋がり、長期記憶となって子どもたちの中に根付く

学校改革マネジメントコース2年/福井市中藤小学校 伊達 薫里

本年度、学年協働で学びを紡いだ、5年生の「宿泊学習」について振り返ってみたい。

毎年見ている紅葉が、ひときわ美しく感じる秋晴れの日。福井の小京都「大野」は、温かな太陽の光に包まれ、来訪者をあたたかく迎えてくれた。まず、大野城に登って、殿様気分で見下ろし、そこに住む人々の暮らしに思いを馳せた。そして、人々の暮らしを支える「水」について「みずの学校」で学んだ。次に、その水、歴史、文化を訪ねて、街なかを班別にオリエンテーリングに出かけた。活動班で協力し、全員が時間内にゴールすることができた。一番不安が大きい活動だっただけに、やり遂げた達成感で、子どもたちはとても満足気な様子であった。その後、絶滅が危惧される「イトヨ」の里を見学。その形態、巣作りの様子など、食い入るように観察を続け、ワークシートに記入した。総合的な学習の時間で追究を行っている「環境」に直結する活動内容に、主体的な取り組みが随所に見られ、新しく獲得する知識に対して、心から満足する様子が見られた。夜は、日本一に選定された満天の美しい星空に、幸運にも出会うことができた。熊鈴を付けて、みんなで声を出しながらキャンプ場まで歩いた。10、9、8…。カウントダウンと共に、いっせいにランタンの明かりを消した。その瞬間に浮かび上がった光景に、「きれーい。」大きな歓声が、こだまし続けた。

二日目は、自然からの贈り物（木材・葉・木の実など）を生かして、アートやゲームにチャレンジした。ゆったりと流れる時間の中で、自然は癒しと喜びを与えてくれるものであることを、じっくりと感ずることができたと思う。

出会う人たちに、自分たちから爽やかなあいさつをし、規律ある態度で、協働して活動をやり遂げることができたことに、子どもたち一人一人の中に、自分を信じる心（自信）が膨らんでいった二日間であった。

バスが学校に到着して、最後の行事、解散式に望んだ子どもたちの姿は、一日前に学校を出発する時とは大きく違っていた。教員の言葉かけに対して、返す「返事」の声の一体感に感動した。素敵な心のキャッチボールがコミュニケーションであるが、そこに限らない進化があると感じることもできた。総括としての私の話では、まず各クラスの代表として、司会やあいさつを担当した児童を大いに賞賛した。そして、活動班のリーダー。常に班員の安全と存在を確認し、活動のゴールに向かってみんなをまとめてくれたことに「ありがとう」を伝えた。そして、青少年自然の家での宿泊室の室長。多分心が解放され、少しはしゃぎがちになる場面をコントロールし、室長会議での協議事項を確かに伝え、翌日の活動につないでくれたであろう行動に対しての「ありがとう」を伝えた。最後に、準備を始めて約一か月、教師が伝え、教え、いっしょに考えて決めてきたことをしっかり思い出し、そこから考え、活動のゴールに向かって頑張り続けることができた、今ここに集うすべての子どもたちに「ありがとう」を伝えた。はにかみながらも、満足気な様子が見て取れた。私が背筋を伸ばし、礼をしようとした瞬間。ほぼ全員の背筋もピンと伸び、互いに礼を交わすことができた。「そう、今の行動が「自信」というものです。今の気持ちを来年度、最高学年として学校を牽引するパワーとエネルギーに変えていきましょう。今の君たちなら、きっとできるはずですよ。」と伝えた。「心が変われば行動が変わる」ことを実感させたいと思い、子どもたちに届けた言葉である。

このように、子どもたちを変容させることができたのはどうしてなのか。事前学習では、学びの意欲の喚起。いかに早くその場に行きたくて学びたいと思わせることができるかにかかっている。当日は、「子どもたちの様子を見取り、次なる活動に向かわせるため

に、どのような支援をすると良いかを常に考えること」。支援には言葉かけと行動がある。行動とは、笑顔で「いいね」を伝え続けること。「何が、いいのか」を、具体的に伝えること。その行動により、子どもたちは安心する。「これだいいんだ」と思える。そして、「次にどうしたらよいか」の視点を与える言葉かけを行う。焦点を絞り、具体的に、端的に、分かりやすく。そうすることで、子どもたちは活動に見通しをもつことができる。不安が安心に変わる瞬間である。この作業を丁寧に行うことが大切である。

教職大学院2年目に当たり、本年度も学年の教員が協働で「いかに学びを繋ぐか」に挑戦している。総合的な学習の時間と道徳科を核としたカリキュラム・マネジメントである。その成果が、子どもたちの主体的な学びの姿を生み出し、彼らの中に自信という自己肯定感をいくばくかでも育むことができたと感じている。学びが繋がりと、子どもたちの意識が繋がっていくことで、知が生まれ、活用され、それらが彼らの中に長期記憶として根付いていくものになると、今思う。

2年間の学び

学校改革マネジメントコース2年/福井県立丸岡高等学校 西岡 晃未

今から約2年前の平成30年12月、私は教職大学院の受験についてとてもとても悩んでいました。その年度に発足した授業力向上リーダーチームのチーフである先生が生き生きと活躍され、学校全体の取組を進めていらっしゃるって、その授業力向上リーダーチームのメンバーとして、憧れる気持ちもありました。また、毎日が「普通」に過ぎていくなかで、「このままでいいのだろうか」という少しの不安や焦りのようなものもありました。しかし、人前で話すことも苦手、レポートなどを書くことも苦手、勉強も苦手な私が本当にやっていけるのかという大きな大きな不安は拭い切れませんでした。また、学校改革マネジメントコースという、学校全体のことを考えながら実践していくコースを選択することにも迷いがあり、寝ても覚めてもずっと教職大学院のことを考えていました。そんな自分では何も決めることができない優柔不断な私が、やっと受験を決めたのは、当時、教職大学院に通っていらっしゃる授業力向上リーダーチームのチーフの先生と、教頭先生(現校長先生)の勧めがあったからです。「授業力向上」と「探究の時間の充実」、この二本立てで、平成31年度、新しい元号が始まる年度の丸岡高校を盛り上げていこうという話に背中を押され、「やれるだけやってみようかな」とほんの少しの好奇心が芽生えたのです。

私は「探究」について実践し、探究活動の授業への取り入れ方について学んでいこうと考えました。

一旦決めてしまうと、流れのままに進んでいくことは得意ですので、実際この2年間は、充実していましたし、楽しんで取り組んでいたと思います。諸先輩方の実践記録を読み、自分の実践と照らし合わせて省察した集中講座や、様々な業種の方々からお話を聞いたラウンドテーブル。そして、自分の実践を語り、見つめ直し、次の日からのやる気に繋がった月間カンファレンス。毎回テーマに基づいて、校種も年代も違うメンバーで話したり聞いたりすることは、最初は慣れておらず、ギクシャクした感じになっておりましたが、回数を重ねるにつれて、自分では思いつかないようなアイデアをいただくなど、とても有意義な時間を過ごすことができました。

あれから、早2年。振り返ってみると、教職大学院での学びを本当に学校に還元できているのか、私が取り組んできたことは学校や生徒たちに役に立っているのか、まだまだ不十分ではないだろうか、自問自答するばかりです。目の前の仕事に追われ(と言っても、目の前の仕事も十分にできていませんが)、今年度前期の拙い取組をコロナ禍のせいにし、せつなくカンファレンスや集中講座で多くのことを学んで

きたはずなのに、実践に生かせていないことが心残りです。

と、ここまで書いて一つ感じたことがあります。この教職大学院での学びは、ここで終わるわけではないのではないか、ということです。この2年間、多くのことを教えてくださった大学院の先生方、一緒に過ごしてきた先生方との繋がりや修了を迎えても切れることはありません。また、実践は報告を書き終え

た時点で終わるものではなく、今後もずっと続いていくものであり、さらなる展開をもって続けていくべきものであると思います。この2年間で、その場の実践だけでしか使えないのではなく、成長し続ける方法も学ぶことができました。これから、実践を積み重ね、省察し、学び続けることが私の毎日の「普通」になるように心掛けていきたいと思っています。ありがとうございました。

10・11 月合同カンファレンス報告

対話を通して、新たな視点を得る

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学附属義務教育学校後期課程

高島 伊吹

月間合同カンファレンスでは、世代を超えて様々な先生方との交流を図ることができる。私自身、様々な思いがあり、インターンシップや、週間カンファレンスを通して学びを進めているが、様々な立場、年齢の人と話すことには自分自身の価値観にとらわれな思考を育てるという良さがあると思っている。今回の月間合同カンファレンスを通して、他教科の先生や、他校種の先生のお話を聞き、自分自身の教育観について捉えなおすことができたと考えている。

私は、数学を専門として、よりより授業、特に「生徒にどのように数学を好きになってもらおうか」という思いがある。数学は好き嫌いが二極化しやすい科目だと思っており、数学が苦手な人に数学を好きになってもらえるのか現段階では正直何もわからない。ただ、今回のカンファレンスでは、そのヒントになるような視点を得ることができたのではないかと思われる。それは、数学を嫌いな生徒に対して真っ向勝負を行ったとしても数学を好きになることはないのではないか、ということである。私は、「性向善」という言葉を大切にしている。すべての子どもたちは、生まれつき善くなろうとするという考え方であ

る。そもそも、子どもたちも、善くなりたいという存在であるため、学び、成長したいという思いは必ずある。その思いを、嫌いなことを無理にさせて学ぶこと自体を辛い、苦しいと思わせてしまっはいけないと思う。カンファレンスでは、「興味・関心とおもしろさは別だ」という言葉をいただいた。確かに、その通りだと思った。では、どのように子どもに数学を学んでもらおうかと考えたときに、興味・関心からのアプローチ、おもしろさからのアプローチのそれぞれの視点が必要ではないかと考える。

興味・関心からのアプローチというのは、そもそも人は興味・関心があるものからしか他のものに対しての興味・関心は生まれないと考えている。例えば、自分自身にとって身近にある携帯料金は実は関数という分野とつながっているなど、身近なこととつなげていくことが、数学に対する興味・関心をひくことができるのではないかと考えられる。子どもにとって身近なことは、日常生活や、他教科である。そのようなことと関連づけることが1つの視点である。

おもしろさからのアプローチというのは、数学そのものがおもしろいものと思えるようなアプローチ

である。例えば、確率の分野では、直感的には分かっているが、実は計算することで、正確な値を導き出せる。直感を論理にしていけるというのは数学のおもしろさとしての1つのアプローチであると思う。

月間カンファレンスを通して、視点が広がり、よりより授業実践ができるように今後も学んでいきたいと思う。

『視点を広げる』

授業研究・教職専門性開発コース1年/坂井市立丸岡南中学校 荒木 裕里香

新型コロナウイルス感染症の影響により、社会に様々な変化が起きた、2020年がもうすぐ終わりを迎えようとしている。10月の合同カンファレンスにはオンラインで参加をしたため、今年度最後の合同カンファレンスが、私にとっては、初めての対面での合同カンファレンスとなった。今回の合同カンファレンスでは、「学校・園のネットワークを結び、互いの実践研究を支え、学び合う」というテーマのもと語り合った。自らの実践を語り、また、他校・他園の先生方のお話を聴くことで、たくさんの気づきが生まれる場となった。今年は、様々な制約があり、公開授業へ参加したり、他の学校に実際に行ったりすることはできないまま、今回のカンファレンスを迎えた。しかし、この教職大学院では、毎週の週間カンファレンスや月1回の合同カンファレンスにおいて、他校の先生方や他校でインターンを行っている院生との交流の場が設定されているので、私は、日々他校から学んでいることが多いと実感している。

午前中のグループセッションでは、同じグループに、幼稚園、小学校、高校の先生方がいらっしやっただけで、異なる校種の先生方との語り合いとなった。公開授業に参加する雰囲気(土壌、文化)ができていない学校とできていない学校があること、授業を見に行く側もする側も、授業を公開することのメリットを感じられていないと公開授業をする効果が得られないこと、教師にとってだけでなく、生徒にとっても授業を見てもらうことのメリットはあることなど様々なお話を聞くことができた。また、学校を変えた

という願いをもつ人たちは、それぞれに学校の現状やこれからの教育に対して危機感を抱えているということ、改めて実感した。

午後のグループセッションでは、同じストレートマスターのM1、M2のメンバーでの語り合いとなった。社会科の授業実践や、授業を見る際の視点に関する話題が中心となった。普段の週間カンファレンスでも語り合っているメンバーではあったが、同じ社会科として、日々の実践について語り合う機会は貴重な時間となった。授業の中で、子どもの考えがいつ変化したのか、なぜ変化したのかということ、日々の授業観察で見取ることが、自分の実践につながっていくという話を受け、自分自身の授業観察を振り返ってみると、そういった視点では授業を見ることができていないように感じた。今後、授業実践や授業観察を行っていく際に、意識してみたい。

毎回の合同カンファレンスは、私にとって、視点を広げる場となっていると感じている。学校も異なり、校種も異なり、また、年代や経験も異なる人たちが集まることで、様々なお話から様々な視点が得られる。今回のカンファレンスでも、同様に、公開授業に参加することについてや、授業を見る(する)ことについての新しい発見が生まれた。これらの広がった視点から多角的に自分の実践を省察しつつ、少しずつ成長していきたいと考える。また、話を聞くだけでなく、やはり、実際に公開授業への参加や他校を訪問する経験を、今後してみたいと感じた。

他者の学びを自分に還元するには

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校前期課程 石田 涼

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大によってオンラインによって週間カンファレンス、月間カンファレンス、ラウンドテーブルが開催されているなか、9月以降徐々に対面でのカンファレンスが最大限の注意を払いながらではありますが可能になってきました。改めて対面で直接いろんな先生方と語り合える機会があることをうれしく思います。オンラインは自宅から参加することができ、今まで経験がなかった分、非常に効率的であることを実感しました。しかし、いろんな先生方が集まる空気感という非常に漠然としたものですが、安心感が生まれ、気軽に気になったことを質問することができたり、セッションが終わった後のちょっとした無駄話など人と人とのつながりが重要な教師という職業を目指している身として、改めて経験を語り合うことだけではない、人とのつながりという部分に非常にありがたさを感じています。

11月のテーマは「他校の実践を支える」でした。例年、私のインターン先である福井大学附属義務教育学校では研究集会が開催されますが今年は開催されませんでした。また、昨年度私は至民中学校、武生高校の研究集会に参加させて頂き、普段学べない他校の実践を知ることができました。今年は各学校での研究集会は開催されたとしても制限があり、なかなか例年のように意欲的に参加することは難しかったと思います。しかし、そんな中でも公開研究の概要や中学校の研究主任として研究会を開催するのに苦労した話をお聞きしたりと普段聞けない話が聞けました。また、午後には社会科のストレートマスターのM1メンバーと話し合うことで、「授業をどうみたらいいのかわかるか?」「気がかりな子に対して自分がどのように関わっていけばいいのかわかるか?」といった内容の話を

することができました。改めて社会科の院生同士で話をするのは、互いの課題意識の中に自分を投影させて話し合っていくことで「自分だったらこうするな」ということを考えているので、自分の実践ではないけれども、あたかもそれが自分の経験として蓄積させていくような感覚を得ることができます。自分だけの実践では経験できないことを他の院生の実践を聞くことで、協働で高め合っていくことの良さが教職大学院の最大の強みであることを強く思います。

11月の月間カンファレンスでは、あらゆる実践にふれ自分にはない視点や経験にたくさんふれることができました。自分が大事にしたいのは「コピーではなく、自分に還元できるようにアレンジする」ということです。インターンシップで授業を参観したり、他校の実践研究で学んだりしたことでもいいと思ったことを真似をするのも重要であると思います。しかし、それに対して自分がいかに意義を見いだしているかわかるかが重要だということを昨年の実践で痛感しました。ただマネをするだけでなく、自分の進みたい方向や育成したい人物像に向かう手だてとしてマネしたいと思ったことが果たして有効なのかということに常に考えていきたいです。

2年間の教職大学院でのインターンシップやカンファレンスも終盤に差し掛かってきました。これから先、院生としてではなく、専任の教員として実践していくことになります。それでも変わらず大切にしたいことは、常に他者、他校から学ぶことを忘れることなく、学んだことを吟味し自分の実践に還元していくということです。その学んでいく力を残りの教職大学院での生活で院生のみなさんと協働しながら高め合っていきたいです。

互いの実践研究を支援、学び合う

～11月の合同カンファレンスを振り返って～

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立足羽高等学校 前田 美知恵

私が勤務する足羽高校は進路多様校で、いわゆる教育困難校である。その中で、何とか授業が成り立つように教員は奮闘している。「毎日が戦い！」である。本年度は、英語主任と教育相談、1年から3年までの5種類の授業案を考えながら、校務分掌の仕事も同時進行で処理していかなければいけない。という重圧のなかで、教職大学院の先生方や他校の先生方からの知恵を学ばば、業務を的確にかつ迅速にうまくこなせるかもしれないと考え、本年度4月より教職大学院で学ぶことになった。

教職大学院で学び始めて、カンファレンスを通して自分の実践を振り返り、他校の実践から学ぶことで、自分自身の指導や仕事の在り方に変容が見られるようになった。毎回、合同カンファレンスで語り合うことで、「こうすれば良いかも！」というヒントが頂けるのだ。そして、他校の先生と語り合うことで励まされ、翌週からの仕事の活力にもなる。

11月のテーマは『他校の研究から学ぶ』ということで、私は、オンラインで東京学芸大学の英語科の授業を見て、研究会にもオンラインで参加した。今年度の自分の1時間の授業の流れが、何となく定まってきたところで、勤務校での研究グループの中で、11月に公開授業をすることになっていた。東京学芸大学の授業を見て、『取り入れられるものは取り入れよう！』とワクワクしながら、授業研究を行った。実際に授業を見たときに1時間の授業の中で、「①導入→②リスニング→③リーディング→④表現の習得→⑤音読→⑥Q&A →⑦リテリング→⑧ディスカッションと盛りだくさんの内容だった。「同じことをうちの学校でもできるだろうか・・・」と考えた。生徒の状況を考えると、この盛りだくさんの内容を行ったところで、どれも消化不良で終わり、生徒にとっては、わけのわからない1時間になると思った。

勤務校の特徴は、良くも悪くも『意思表示』ができる生徒が多い所である。『分からない』ことは、『分

からない』、『やりたくないこと』は『やりたくない』。『楽しい』ことは『楽しい』。授業をやる上で、わからないとき、つまらないときは、顔や態度、時には「思いを声に出す」ため、手応えがすぐにわかる。楽しい時は、質問が飛び交い、英語の発音も声に出して練習するので、生徒の状況が把握しやすく、授業がやりやすい面がある。休校あけの6月より、生徒の様子や反応を見ながら、今の授業のスタイルを作り上げてきた。ある程度流れが決まっているところに、新しいものをいきなり取り入れることにも不安があった。しかし、そろそろ生徒も私もお互いに慣れてしまい、少しずつ惰性が働くころである。少しずつでも変化を加えていかなければ、自分も生徒も成長していかないだろうと思ったので、自分が担当する普通科の発展クラスにおいて、まずは、少しずつ負荷をかける形でリテリングをやってみようと考え、実践しているところである。

夏の集中講座で1年目のまとめの構想を考えた時、自分の原点を振り返った。自分が英語科教員になったきっかけは、中学・高校時代の担任の先生（恩師）の影響が大きい。高校時代の恩師は、「藤島高校から異動してきたばかりであり、自分が担任のクラスだけは藤島高校で使っていたものと同じ教材を使います。」と言い、レベルを落とさずに授業を行って下さった。私は、いわゆる進学校ではなく、家から程近い高校の特進クラスにいたのだが、この恩師のおかげで、英語だけは、模試で常に良い成績をおさめることができた。現在の足羽高校に赴任してきた時に、この恩師の言葉を思い出した。中には、勉強したい子、能力の高い子がいるかもしれない。先生が、「うちの生徒はできないから。」と上限を決めて、生徒の伸びる可能性を潰してはいけないと常に考えている。

足羽高校は普通科と国際科があり、国際科は国際交流活動を通じて、探究的な活動を進めているが、普通科での探究は今ひとつといったところだ。グルー

セッションの中で、他校の先生方が、「探究的な活動を進めていく中で、初めて新しいことに挑戦するときに、周囲からの反発やうまく事が運ばないことが多々あるが、まず、やってみて修正し、更にやってみて修正というサイクルの中で、少しずつ良いもの

になってくる。」とおっしゃっていた。何事もやってみないと始まらないのだ。今後も、勤務校で様々なチャレンジをし、教職大学院での学びを毎回省察しながら日々研鑽していきたい。

他校から学ぶカンファレンス

学校改革マネジメントコース2年/坂井市立丸岡南中学校 山田 充

今回の月間カンファレンスは私にとって、教職大学院2年間の最後となる。昨年4月に初めての「カンファレンス」というものに身構え、緊張しながら参加したことを今でも覚えている。回を重ねるごとに自分の素直な気持ちや悩みを語るできるようになり、また、他校との実践の共有をカンファレンスという形式で話し合うことの意義を感じるようになった。今では月間のカンファレンスでの学びを楽しみにするようになっているが、今回は最後のカンファレンスということで、寂しい気持ちと、教職大学院での学びが終わりに向かいつつある少しの達成感、そして「このカンファレンスが終わってしまえば、次は長期実践報告を仕上げることになる」という不安な気持ちが入り交じった複雑な思いであった。

11月カンファレンスでは、「学校・園のネットワークを結び、互いの実践研究を支え、学び合う」をテーマに、他校の研究から学ぶ経験について意見交換が行われた。昨年度は県の自主研究活動支援事業補助金があったため、私と若手教員の2名で茨城県に視察へ行くことができた。丸岡南中学校と同じ教科センター方式を取り入れている中学校への視察であり、視察校での学びもちろん多かったが、私にとって行き帰りの電車内で若手教員との話し合いから学ぶことの方が多く感じた。同じ学校に勤務していても研究についてじっくり話すことはなかったため、往復の6時間はざっくばらんに研究に対する思いを話し合うことができ、その後の自分の研究の方向性について考えることができた。また私たちが現地で学んだこと、電車内で話し合ったことを、月1回開催

される「研究の日」において全教員で共有できたことは、まさに他校から学ぶことの意義を感じることができたものであった。本年度はコロナ禍で、他校への視察はできずに終わるのだろうと考えていたときに、教職大学院からオンラインで行われる研究会の紹介があり、私は熊本大学附属中学校の研究発表会に参加することができた。Zoomで授業の様子を見ることはできたが、実際の生徒の様子を見取ることができなかったが、研究発表会の中で附属中学校全体及び英語科の研究の様子がよく伝わった。私は本年度、研究副主任という立場であるので、オンラインでの研究会の持ち方について特に学ぶことが多かった。

私自身の「他校からの学び」はこの研究発表会に参加したことだけだ、と私は感じていたが、11月のカンファレンスで語り合う中で、「この月間カンファレンスもまた他校からの学びになる」ことに気付いた。「コロナ禍だから」と研究をやめてしまうのではなく、今でもできる、今だからできることに注視し、研究及び実践を続けている同じ教職大学院生の先生方と話をしながら多くのことを学ばせていただいた。教職大学院での最後の月間カンファレンスでこのことに気付くことができてよかった。「他校から学ぶ＝研究発表会に参加する」ではなく、お互いの研究や実践を話し合うことが「他校から学ぶ」ということだという当たり前のことを再確認した。このことは研究についても同様に考えることができる。「研究は、研究発表会はこうあるべき」という私自身が思い込んでいる既成概念を壊し、今できることを積み重ね、自分以外の先生（他校の先生も勤務校内の先生も）と話

し合い、語り合いながら交流を広げ、楽しみながら研究を進めていきたい。

あと数ヶ月で、長期実践報告を完成させなければならぬ。これまでの月間カンファレンスやラウン

ドテーブルでの学びを自分の長期実践報告に取り入れながら、これまでの自分の実践を省察し、まとめていきたい。

顔を見て、話して ～11月合同カンファレンス～

学校改革マネジメントコース1年/勝山市立成器南小学校 前川 壽人

11月21日に11月の合同カンファレンスが開催されました。今年度はほとんどオンラインで参加してきましたが、今回久々に対面での参加となりました。得られたことは多く、対面だからこそ感じられた事もあります。先生方と話す中で気づいた事柄を記載します。

午前中は福井市内3こども園の園長先生方による『学校・園のネットワークを結び、互いの実践研究を支援、学び合う』の実践紹介をしていただきました。3園で働く人たちが園長を中心にネットワークを構築し、人的交流を重ね、互いに学び合う姿が伝わりました。私は職員の立場で実践を聞きましたが、学校改革の初期においてリーダーが周囲を巻き込んで目標に向かって行動する事は、部下の立場から見ると頼もしく感じられたことでしょうか。中には変化を嫌う層もあったでしょうが、3園長はそのことを理解しつつ、時に強引に変革を起こしていました。

一番強く感じた事は、自らが変化しなければこれからの幼児教育の世界で生き残っていけない、という危機感を強くもっていらっしゃったことです。我々小中学校教員はこれほどの危機感を持って学校改革に取り組んでいるのでしょうか。自分たちの改革にかける熱意が問われたような気がしました。

その後は対面で附属義務後期の高島先生、越前市ALTのCharmoyl Roopen先生、福井大学の寺岡教授と他校の研究から学ぶ経験を語り、聴き合いました。まず、最初に感じた事は「顔を見て話すのもいいなあ。」ということでした。お二方が感じられていることを

直接お聞きする事ができましたが、Zoomでの会話とちがって会話がスムーズに流れました。また、表情やちょっとした仕草から先生方の思いが伝わりました。オンラインでの話し合いを否定するものではありませんが、対面で話すことの良さも強く感じました。

午後は長期実践研究報告・1年目のまとめの構想を前田朋子教諭（明倫中） 川端宏明教諭（武生西小） 淵本教授（福井大学）と語り合いました。

その中で管理職との関係性について話題になりました。中学校と比して、小学校はより校長の権限が強いと感じています。小学校校長の中には学級の細かなことまで指示指導してくる場合もあります。学び合う集団としてのコミュニティが活発に活動をしたとして、その活動はどの程度まで学校の運営に携われるのでしょうか。自分たちの活動はだれが保証し、認めてくれるのか悩んでいる事を話しました。

他にも、立場が変わって悩みが増えた、ということも話題になりました。今回のコロナ過では迅速に様々な判断をしなければならなくなりました。前例もなく、正解もわからない中で、教員の意思統一が難しくなりました。様々な判断を迫られる中で、若手の教員もベテランの教員もそれぞれが考えを持ち、意見を言うようになりました。学年主任の立場で学年の教員の納得を得られるようにコミュニティ内で調整することが増え、それがとてもつらいというお話には、私自身同じような悩みを持っていたこともあり、共感しました。

最後に、武生西小学校の川端教諭からは若手教員との接し方について話題提供がありました。その若手の先生は児童の指導について悩みを抱えていましたが、なかなか話してくれなかったそうです。しかし、あるとき川端教諭も子どもとの関わりに悩んでいることを話すと、相手の若手教諭も自分の悩みを語るようになり、いっしょに解決方法を探るようになったそうです。先輩教員として、つい自分の考えを押しつけたり、相手の悩みに安易な解決策を示してしま

ったりしがちですが、悩みを共有することが真に若手教員への指導になるのではないかと感じました。

今回、久しぶりに先生方と顔を合わせて話ことができました。顔を合わせることで、その先生が持つ「熱」が伝わるような気がします。学校では少し年上の先生方とこれほど話し合うことはありません。悩んでいること、チャレンジしていることを話し、刺激を与えてくださる教職大学院の先生方に感謝申し上げます。

気付くことの価値 vol.2

学校改革マネジメントコース2年/坂井市立長畝小学校 齋藤 雅実

10月の合同カンファレンスはオンサイト形式を選択。久しぶりの6Fコラボレーションホール。エレベーターを降りたときからワクワクした。昨年からお世話になっている大学院の先生方や院生の先生方とお会いすることができとてもうれしかった。コロナ禍で長期休業が明けて登校してくる子供たちの喜びがよく分かった。だからこそ、11月もオンサイト形式を選択した。そして、今回は私にとって最後の合同カンファレンス。身体全身で話を聴き、一生懸命考え、新たなことに気付いていきたいと思った。

テーマは、「学校・園のネットワークを結び、互いの実践研究を支え、学び合う」。オリエンテーションで、「他校のプロセスから学ぶことが大切。結果から学ぶのではない。」が心に残った。確かに授業参観だけでは研究のプロセスが見えてこない。だからこそ、事後研究会でプロセス知ることが大切だと思う。実践と課題が参観者に見えることで、プロセスを理解し、参観者の気付きや学びにつながっていくと思う。表面的なことやテクニックを見て学んだつもりになってはいけないと思う。公開授業に参加する先生方の意識は種々あるが、子どもの学びの事実と研究のプロセスに触れることで、同じ土俵で考え、話し合うことができると思う。だからこそ、研究会では積極的に発言し、他校の研究を支えていくことは大事なことでと思う。

実践紹介では、M2の伊藤康弘先生（さくら認定こども園長）、嵩谷浩太郎先生（幼保連携型認定こども園和田子ども園長）、大柳世津子先生（認定こども園福井校成幼稚園長）から貴重なお話を伺った。園の将来を考えた共通の思いの下、職員間の交流を深めながら実践研究を進めていく内容であった。園長一人一人がビジョンをもち、園の良さを共有していくことは、大きな強みであると思う。3人の強い思いの連携は、固定しがちな職員の「意識」を変容させていった。これは、学校現場でも同じことが言えるのではないかと。スクールリーダーがビジョンを描き、教職員一人一人がビジョンを共有し、核となるリーダーが具体的に示しながら効果的にPDCAサイクルを繰り返し展開させていく。私たちは進みゆく方向を道標として示していくことが大切だと思う。「志す」とは、「心がそのほうに向かう。成し遂げようとする目標を心に決める」（広辞苑より）だ。志を立ててスクールプラン実現に向けて協働し、成し遂げようと実践し省察を繰り返していくことで、実現していけると思う。リーダーは広い視野と深い考えを持ちながら、一人一人の思いに寄り添いながら進むことが大切だと思う。

また、セッションを通して、教職員のコミュニケーション力の大切さを学んだ。チームとなって大きな力となるためには、単なる連携ではなく、相手の立場

や考えを尊重しながらよりよくなるために支え合うことが大切だと思う。そのプロセスの中に、本当の理解が生まれ、真に支え合う仲間になるのだと思う。

今回のカンファレンスでも、同じ志を持った仲間と語り、聴き合う中で、新たな気付きと学びを得ることができた。この気付きと学びをまた勤務校で実践

し、省察をしながら繰り返し取り組んでいきたい。次にコラボレーションホールに来るときは、これまでの実践を問い直し、まとめているときである。残されたわずかの期間を、教職大学院での学びをもとに一日一日、子供たちや先生方と学びを深め合っていきたい。

11月月間合同カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース1年/小浜市立小浜中学校 小林 正尚

一昨年の県のマネジメント研修、そして、昨年度の教職大学院の事前履修を経て、今年4月、正式に入学させていただき、多くの先生方との交流を通じてたくさんの学びを得ることができている。2年前、あまり見通しをもてないままのスタートであったが、時間が経つのは早く、いよいよまとめの時期となった。2年間の学びをしっかりと振り返り、長期実践報告執筆よる学びを今後には是非生かしていけるとようにしたいと考えている。

11月の合同カンファレンスは、「学校・園のネットワークを結び、互いの実践研究を支え、学び合う」をテーマに、今回も異校種の先生方との交流を通して、多くの学びを得ることができた。

今回のカンファレンス参加にあたり、事前に和歌山大学教育学部附属中学校の研究会にオンラインで参加させていただき、「評価」について考えるきっかけや新たな視点を獲得することができた。研究会では、参加者が希望した小テーマごとのグループに分かれ、あらかじめ用意された事例をもとに意見交流を行った。その後、ジグソー型研修ということで、他テーマの先生方と新たなグループで話し合った。限られた時間ではあったが、様々な視点からの多くの意見が出され、私にとって大変大きな学びとなった。

今回の研究会では、小テーマごとの意見交流後のジグソー型研修を行い、グループでは事例をもとに考えることで焦点を絞り、効率的に様々な意見を交流させる工夫がなされていた。また、オンラインの機能を有効に活用し、グループ分けや迅速な意見の集

約、視覚化もなされていた。他府県の多くの先生とも交流を通して、「評価」に対する理解が深まったことはもちろん、オンラインの長所を十分に生かした研究会の持ち方も大きな学びとなった。何よりこの研究会を校内外の多く先生方が支えておられることを知り、同僚性やネットワークの素晴らしさを十分に感じる研究会であった。

翌日のカンファレンスでは、福井市の3園の園長先生から、「公開保育による学び合う場」について実践事例を紹介いただいた。定期的に保育について公開し合うことで、日々の活動を客観的に振り返り、更に新たな視点を獲得できているというお話であった。また、職員の方が毎年教職大学院で学ぶことを継続されており、「学び合う同僚性や風土づくりをめざしている」という言葉に、組織をマネジメントしていく上で重要な視点だと感じた。

また、午後のグループセッションでも、現在、取組をいかに学校に根づかせ、「学校文化」を形成していくかということが課題となっているというお話があった。新しい取組を始め、継続させていくためには、いかに同僚からの理解、賛同を得ていくかということが大きな課題となってくる。本校も新しく始めようとしている取組や年数の浅い取組をいかに定着させていくかという段階のものもあり、自校の様子と重ねながら聞かせていただいた。取組の目的、その有効性について、十分に話し合いながら進めていくことが重要だと考える。他の先生からは、「目的」の共有のためには、まず、「実態」、「困り感」の共有が重

要であり、その共有はインフォーマルな場で行われ、ボトムアップの形をとることがよいというお話もあった。更に、子ども、保護者の変容を同僚に見せることが、同僚の理解や多忙感の軽減につながるというお話も大変印象深かった。

このような意見交流をしながら、以前読んだ「コミュニティ・オブ・プラクティス」の中の「実践コミュニティ育成の7原則」の1つとして、「価値に焦点を

当てる」ことの重要性が挙げられていたことが思い出された。著書の「価値を創造できない人も多いという状態の中、リーダーはビジョンや意義を丁寧に示す必要がある。」とも書かれていた。

今後、現場でも新たな取組を進めていく上で、大切にしていかなければならない視点であることは間違いない。教職大学院で得た様々な経験や知識をこれからの学校づくり是非生かしていきたい。

互いに学び合う学校文化を考える

学校改革マネジメントコース1年/あわら市立芦原中学校 渡辺 博英

11月の合同カンファレンスでは、「園のネットワークを結び、互いの実践研究を支え学び合う」と題し、福井校成幼稚園、さくら認定こども園、和田こども園の3つの園が公開保育を通じて学び合う実践について話題提供をいただいた。その中で、特に印象的だったことは、以下の3点である。

(1) 他園を観ることで、自園の良さや改善点に気づくことができる。

これまでの自分の経験に振り返ってみると、授業や学級経営など、普段の取組みの中では、自分の実践についての長所、短所が分かっているようで分かっていないものである。長所であると思っていたことが短所であったり、またはその逆であったりする。他校の研究会等に参加したときや、校内での授業公開の時など、自分の眼で他者を見た時、また、他者の眼から見られた時に初めて気付くことが多かった。現在、教職大学院での集中講座やカンファレンスがそれであり、いつも新しい視点や発見がある。しかしながら、コロナ禍の現状では他校との共同研究というところまではなかなか難しいのかもしれない。ただ、校内で、「職員同士が、お互いに支え合い、学び合う」実践が、その学校の文化として定着すれば、それが、いずれ他校との協働実践につながるものと考え。現在、自分の学年では、週1回の道徳の授業を各担任がローテーションで行っている。本来「特別の教科」である道徳は、担任が行うものなのだが、別クラスの担任が入ることで、いつもと違う雰囲気、生徒にと

っては身を引き締めて授業を受けることができるという利点がある。授業後には担任同士で情報交換をし、普段とは違う生徒のよさに気付くことができる。また、通常は毎週教材研究をしなければならないところを、3～4週間に一度のペースでよいため、業務改善の一助ともなっている。今後、教科の授業においても、参観するだけでなく、教科担任を「入れ替え」て授業をすることによって、多くの眼で、生徒一人一人を見取り、よりよい「評価」につなげていきたいと考える。

(2) 保育を褒めてもらうことで自信が付き、明日への保育に意欲がわく。

褒められてうれしくない人はいない。これは、大人も子どもも関係なく人間であれば、当たり前のことであろう。これまでの自分の反省にもなるのだが、授業参観等では、どうしても「こうするともっとよかった」「こういう方法もあったのではないか」といった意見を言ってしまうがちである。研究授業をされる先生は、そのようなことは百も承知なのである。苦労して組み立てた授業なのだから、良い点もそうでない点も授業者自身が一番よく分かっている。だからこそ、良かった点を認め、称えることがその授業者の先生への支えになり、自分の学びにもなると考える。良いことは「他人の成功から学ぶ」のであり、改善点は「自分の失敗から学ぶ」のである。

(3) それぞれの先生のやりたいこと、チャレンジ精神が旺盛になってきた。

一つ一つの実践に対して、「上手くいった、上手くいかなかった」という反省は当然必要だろう。しかし、それ以上に、「実践し続けることで得られるものが必ずある」ことや「何もしなければ何も得られない、何も変えられない」という意識を我々教員が共有することが、学校改革にとって最も必要なことであると思う。

現在、自分の学年では、話し合い活動に力を入れている。今更と思われるかも知れないが、中学校においては学級活動が担任主導の活動や自習の時間になりがちで、生徒の自治活動に利用されることは少ない。また、学年の生徒たちを見ると、学力以外に「表現力」「男女の仲」「グループ活動」などの非認知能力に課題があると考えられる。これらの克服のため、学級活動において定期的に「話し合い活動」を取り入れている。司会をする生徒も学級委員だけでなく、その都度募集し、毎回違う生徒がリーダー役を任されている。最初のうちは、男女が机を合わさなかったり、全く話

し合いに参加しない生徒がいたりといった問題点があったのだが、回数を重ねるうちに、少しずつではあるが積極性が見られるようになってきた。生徒たちはゆっくりだが、確実に変わってきていると感じられる。当初は自分と担当の先生の考えで始まったことだが、各担任から自クラスの問題点を話し合いたいという意欲的な発言が出るようになってきている。生徒とともに先生方も学んでいる様子がとても頼もしい。どのような形であれ、「話し合い活動」は今後も続けていきたい。

他校との協働ではなくとも、一つの学校の中でも、同じような実践は可能と考える。教科を超えた協働、学年を超えた協働など、学び合うための実現可能なアイデアはすぐ側にある。学校改革は、我々教員のこれまでの固定概念を取り払う意識改革そのものであると思う。

「知の難きに非ず 知に処するは則ち難し」

学校改革マネジメントコース1年/元福井県教育委員会 林 雅則

この原稿を書いている12月初めも、感染者数・重症者数・死者数が日々過去最高を更新し、新型コロナウイルスの猛威は止まるところを知りません。年末年始を迎え、学校では、受験・入試への対応はじめ、次年度に向けた年次計画を立てなければならないでしょう。今年は予期せぬ感染拡大の『緊急事態』として、オンラインでの対応や行事の中止等を“やむを得ぬ”措置であると認知されたかもしれません。しかし、来年度はそうはいかないでしょう。コロナ前に戻るのではなく、コロナの影響を想定した『ニューノーマル』をつくり上げなければならないからです。それは一つの学校の運営としてではなく学校教育システムのスタンダードとして…。そのためには、学校組織が共に支え合い学び合うネットワーク形成が重要ではないでしょうか。

11月の月間合同カンファレンスのテーマは「学校・園のネットワークを結び、互いの実践研究を支え、学

び合う」でした。前月には福井市内中学校の新任教頭が互いに支え学び合うネットワーク「ひつじの会」が紹介され、今月は旧幼稚園・保育園の垣根を超えた福井市内3園の「公開保育で学び合う場を形成する試み」という、とても意欲的な取組を紹介いただきました。こうした教育実践を通じた学校・園のネットワーク形成が進めば、コロナ禍のみならず、時代の要請にそくした学校・園マネジメントの改革がより良い形で広まるのではないかと心強く感じました。

グループセッションでも、若いストレートマスターの皆さんと他校に学ぶ経験を語り合いました。私も、この1~2か月の間に県内の小・中・高やオンラインでの県外高校の公開授業・公開教育研究会に参加し、ESD教育、地域協働教育、対話的学習での評価法などを学び、異なる学校文化を比較し教育実践の在り方を考える機会となりました。

私が教育行政に携わっていた時、最も心を配っていたことのひとつが、福井県の学校教育の良さを自覚し、足りないところを知ることでした。そのために文化の異なる他県や行政分野で、教員の皆さんに1年間の派遣研修という形で現地体験してもらうことを進めました。同時に、他県の教員を福井県内で派遣研修教員として受け入れました。そのことを通じて、自分たちは当たり前として実践していたことが外から来た先生目で見れば、とても優れていたことに気付き、また、他県で経験することで福井県の教育では十分でなかったことにも気付くことができました。そして、他県や異分野で貴重な経験を積んだ先生方が、戻った学校の中で多くの優れた影響を周りに与え、学校全体が活性化している様子を最近も目の当たりにして、とても感激しました。

他の組織から学ぶ手法は、学校組織のみならず企業経営でも“ベンチマーキング”“ベストプラクティス”として活用され、大きな変革を実現しています。

“ベンチマーキング”は、1980代終りにロバート・C・キャンブなどが提唱したもので、自社のビジネスプロセスの課題を解決するため、同様のプロセスの優良事例(ベストプラクティス)と比較分析を行う手法です。米国のゼネラル・エレクトリック社やサウスウェスト航空の事例が有名です。“ベストプラクティス”という言葉は古く1910年代頃からあるようですが、スタンダードとなった“ベストプラクティス”を無視したからこそ、新たな“ベストプラクティス”を

生み出した例もあります。走り高跳びの「背面飛び」がその例だそうです。また、日本企業では“ベンチマーキング”があまりうまくいかなかったとも言われます。“ベンチマーキング”で最も重要なのは、優良事例のプロセスを研究するだけでは完遂せず、そのプロセス要素を自社に取り込み、自社の業務プロセスを抜本的に見直し、効率化を実現することが必要だとされます。日本企業にはこの部分が欠けていたと考えられています。真似をするだけでは、自分のところの“ベストプラクティス”を生み出すことにはならないということでしょう。また、組織トップ層のコミットメントと組織内メンバーの協力が得られなければ改革にはつながらないです。

中国戦国時代の政治思想書『韓非子』の中に「非知之難也 処知則難也(知の難きに非ず 知に処するは則ち難し)」という一節があります。原典の趣旨とは少し違うかもしれませんが、東京理科大学前学長の藤島昭氏は「知ることはそれほど難しいことではない。知ったあとでどのように対処するかが難しいのである。情報はうまく活用してこそ価値が出てくるということか。」(『理系のための中国古典名言集』2016)と解釈しています。他校の“ベストプラクティス”を学んだとしても、それを自校の置かれた環境、条件、文化に照らして比較分析し、校内のメンバーと共有・協働して実践と省察を繰り返して自校のものとしないう限り、本当の改革にはつながらないということでしょう。

【編集後記】2020年は私たち個々の生活から社会のあり様まで大きな変化がもたらされました。学校という組織についても、新たなあり方「ニューノーマル」を探る動きが急激に加速された1年であったと言えるでしょう。その過程では様々な問題も生じ得ます。本号の巻頭で述べられている「公共性」と「多様性」の実現なども、自分事として省みなければならない課題であると思われます。なお、本号の発行が当初予定より遅れてしまいましたことをお詫びいたします。(I)

教職大学院 Newsletter **No.141**
 2021.2.6 内報版発行
 2021.2.15 公開版発行
 編集・発行・印刷
 福井大学大学院 福井大学・
 奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
 連合教職開発研究科
 教職大学院 Newsletter 編集委員会
 〒910-8507 福井市文京 3-9-1
 dpdtfukui@yahoo.co.jp
